|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 学籍番号 | 201311999 | 氏名 | 春日太郎 | 提出日 | 4月31日 |
| 科目名 | 情報基礎実習-X | 課題名 | 情報基礎実習のレポートの書き方 | 担当教員 | 逸村裕  小泉公乃 |

1. はじめに

これは情報基礎実習のレポートを書くための書式例である。レポートではA4版用紙を縦使い・横書きで使用し、用紙の上下左右にはそれぞれ30mm程度の余白を取る。本文は一段組で、フォントは原則日本語であればMS明朝、英数字であればCenturyとするが、見出しなどにおいてはMSゴシック、Arialを使用してもよい。フォントサイズは10.5ポイント、英数字は半角文字を原則とし、章節を立てる。本稿では、参考のため一般的な実験レポートにおける章節を一部分だが立てた。本授業では用紙節約のため表紙は省略し、代替として1枚目上部に学籍番号などを記した見出しをつけることとする。また、レポートが用紙2枚以上となる際は左上をステイプラ（針無しは不可）で留める。

レポートの最後には参照した図書、雑誌記事・論文、Webページ等の書誌データを記述する。記述方法には様々な流派があるが、本授業ではSIST02を用いよ。

なお、レポートの書き方についての図書は数多く出ている(1,2)ので、レポート作成にあたっては適宜参考にせよ。ただし、分野・授業ごとに書式は異なるため、詳細はその都度担当教員に確認すること。

1. 目的

まずはこのレポートの目的を明らかにする。この実験を通して何を明らかにするのか。

1. 手法

ここでは何をどのように行うことで目的を達成しようとするのかを詳細に記述する。たとえば、実験によって明らかにするのか、それとも調査を行うのかなどを書く。手法は第三者が再現できるよう、紙面の許す限り詳細に書かねばならない。

* 1. 対象
  2. 具体的な方法

1. 結果

　図表をうまく活用し、実験や調査の結果を書く。ただし、単に結果を羅列するだけではなく、データのどこに着目でき、何が言えるのかのまとめもデータごとに必要である。なお、総論としてのまとめは考察のあとに行う。

1. 考察

　結果に基づいて論理的に考察する。結論やまとめは別途章節を立ててもよい。

参照文献

1. 木下是雄. 理科系の作文技術. 中央公論社, 1981, 244p.
2. 河野哲也. レポート・論文の書き方入門. 改訂版, 慶応義塾大学出版会, 1998, 106p.